



(上) 篇說小語物

座講學文本日

卷三第

版社造改

(長谷部製本)

昭和九年二月十五日印刷  
昭和九年二月十九日發行

日本文學講座 第三卷

編纂 山本三生  
代表者 山本三生

發行者 山本三生  
東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 村尾一雄  
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所 改造社

東京市芝區新橋七丁目十二番地  
振替口座 東京八四〇二番  
電話 芝 (43) 自一 一一二一  
至一 一二四番

株式會社秀英印刷

# 日本文學講座 第三卷

## 物語小説篇(上) 目次

小説の歴史	千葉 龜雄
平安朝の物語文學概説	宮田 和 一郎
中世の物語文學	金子 武 雄
近世小説概説	鈴木 敏 也
明治以前小説評論史	久 松 潜 一
竹取物語の研究	高 崎 正 秀
字津保物語の研究	松 尾 聰
落窪物語の研究	岩 城 準 太 郎
源氏物語の研究	岡 崎 義 惠
狭衣物語の研究	篠 崎 五 三 六

濱松中納言物語と寢覺物語	増淵恒吉	一九九
堤中納言物語の研究	入江相政	二三五
伊勢物語の研究	倉野憲司	二四三
大和物語の研究	水野駒雄	二六一
住吉物語の研究	清水泰	二七九
大鏡の研究	北西鶴太郎	二九五
増鏡の研究	和田英松	三一九
榮華物語の研究	波多郁太郎	三四五
歴史物語の研究	沼澤龍雄	三六三

# 小説の歴史

千葉 龜雄

## 一 小説發生の諸條件

小説がいかにして發生したかを知るには、まづ、文學がいかにして發生したかに溯らねばならない。文學發生の動因は、大體、二種に分類され得るであらう。摸倣本能から起つたとか、原始人の恐怖觀念から起つたとか、遊戯衝動であるとか、異性牽引の衝動からであるとか、不可觸、もしくは不可知な、イメイジに觸れようとする憧憬であり、願望であるとか。等等。これらは、要約して心理的條件といはるべきであるし、文學は實用の目的から起つたとか、社會的交感を求める作用だとか、生活の表現であるとか、祭祀や宗教本能から生長した等の諸原理は、重に社會的條件に附屬すべきものであらう。かくして、諸種の異説が入れ交つて居るにかゝはらず、所詮つきつめれば、文學は、自己表現の衝動だといふ唯一の原則に辿りつかねばならない。もし然りとすれば、この二機能の中で、社會要素に基づく諸條件は云ふまでもない。たとへ心理的諸條件は、もともと個人的な作用であるにしても、それがすでに、表現衝動から文學の様式まで展開した場合には、意識すると、意識しないにかゝはらず、そこに個と全とを關係せしめずには居ない。語るものがあれば必ず聞く者がある。また人類は何ものかを聞かうとする欲望に燃える。ここから小説が出發する。小説は、どの國でも「語り」、もしくは「物語」から發生したのである。

文學の原始形態は、口唱文學オオラルリテラチニア、もしくは合唱舞踊オオラルセンズである。日本にあつても、歐洲にあつても、その點では餘り違はない。およそ文學の發展は、言葉の時代、文字の時代（記述時代）、印刷の時代の順序をとつてゐるが、口唱文學も、合唱舞踊も、第一期の言葉時代の文學に屬する。原始の時代、社會がまだ十分に發達しない黎明期にあつては、各部落の力も弱いし、人數も少ない。勢ひ相互の扶助を必要とするために、全體を通ずる社會感情が濃厚にならざるを得ない。喜びにつけ、悲みにつけて、部落の全成員に共通した情緒を表現するために、擇ばれた文學の最初の様式が、合唱舞踊である。それを作り上げる要素は、言葉と、音樂と、行動とであり、成員全部それに參加する。この場合における行動は舞踊であり、言葉は韻文であり、民衆の中の、詩人の才能のあるものが韻文を作り出す。一同が、その詩歌を歌ひつれて舞踊すれば、詩歌と舞踊のリズムを、音樂の伴奏が調整するといふ順序で、文學の原郷はここから始まつたし、だから狭い意味で、文學は詩歌から始まつた。モウルトンが、上代の文學は韻文であり、現代文學の大部分は散文であるといつたのはそれである。何ゆゑに、詩歌が上代にあつたかの理由は、一定の抑揚と音韻を持ち、音數の整つた詩歌の形式が、口唱に都合がよかつた事。言ひ現はすべき意味や内容が、その頃は至つて單純で、詩句の形式に配列するのが容易であつたこと。また詩歌が、音律を持つたために記憶しよかつたこと。上代人の生活が、理性的である散文よりも、矯激な感情性の表現をより多く必要としたこと。個々部落の生活を、共感性によつて結成し、統一する方が都合よかつた事等によるものであらう。

然るにやゝ後代になつて來ると、口唱文學の三位一體は、次第に分裂し始めた。それ／＼の内容と様式が成長し、複雑化して來たために、三つの藝術が、詩歌、舞踊、音樂と完全に獨立することになつたからである。同時に、口唱文學が、記述文學へ推移するための、文字が發明されるやうになつた。文字が世界的にいつ發明された

か。紀元前四世紀に、支那で發明された製紙術を、アラビヤ人が學んで西歐に移入したことや、モオゼが Papyrus と呼ばれる Papyrus を發見し、イヂプト人がそれをギリシヤ、ロオマ、その他の近國に輸入し、ギリシヤ、ロオマの學徒達が盛んにそれを利用した。しかもパピラスが發明される前に、羊皮紙、犢皮紙が使用されてゐた等の事實は、記述時代の紀元が、いかに古い世紀に溯るものであるかを語るものである。そしてその頃の初期時代にあつて、イヂプト、ギリシヤ等には、すでに、小説の原形たるべき諸種の物語があつたといはれるが、いはゞ原形であつて、中には傳説的な存在さへもある。しかし、原形にしる、存在したことは想像され得る。

## 二 物語とローマンス

詩は「歌ひ」であり、小説は「語り」である。小説が、「語り物」として發展した行程はきはめて多岐であるが、「語り」の發生は、必ずしも、手記のための、文字の發生に伴ふ必要はない。と、いふのは、記述以前の、口唱時代においてすらも、「物語」の原形だけはすであつたからだ。たゞそれが、文學としては、幼稚な胎子であつたまでである。物語を内容と様式に分類するとすれば、物語るべき題材は、いついかなる時代にもある。夏の夜空の星影を仰ぎながら、部落の中の熟練な話手が、もしくは尊敬されてゐる老人が、自分の經て來た生活や、戦争談や、奇怪な經驗を露天のたき火を圍んで聞き惚れる部下達に語して聞かせる。いくら熟練な話手であつても、その物語は、恐らく、断片的な事件の寄せ集めであつたらう。しかし長い間の經驗は、彼等の聽衆が、何を喜ぶか、何を擇ぶかを感じするやうになり、その粗末な素材を程よく整理し、無駄を省き、色彩を添へ、彼等の感激を高潮させる工作に力を入れたであらう。上代の單純な、感性にのみ富んだ聽衆達の好む種類の効果的な話材は何であらうか。古代の英雄譚である。また、傳説的に興味ある大事件である。人情譚である。冒險譚である。そこでサムソン、ソ

ロモン、アアサア王、ユリシイズのやうな巨人、トロイの戦争といつた、想像を高揚させる題材が擇ばれる、或は話すべき題材が乏しい場合は、小説は、已に行はれてゐる敘事詩をパラフレイズする作用を働らく。「萬葉集」に載つた浦島の子の長歌が、後に小説化されたのもその一例であらう。なほ注意さるべき事は、小説前期の小説が、部分的にいかにも美しくいものであつても、その形式は、小説と呼ぶよりも、むしろ小話ストオリイ、もしくは奇聞アエクトオツ、スケツチと呼ばれるべき程度の存在である。支那で文字の發明されたのは、四千五百年前、發明者は、黃帝時代の蒼頡であるといはれるが、小説の發達はいちじるしく遅く、漢代に小説といふ文字がすでに現はれ、漢時代の小説として呼ばれるべき「神異傳」(東方朔撰)以下約七八部も著名なものにあつても、いづれも傳説、奇聞の記録以上を出ない。小説としての構成は、後世までいたつて幼稚である。

宮原民平氏は、「唐代の傳奇」において、支那小説の發展を説き、「六朝以前においては、小説とはいふものの、實は一種の奇談集であり、逸話集であるに過ぎなかつた。唐では小説の分化作用が起り、はじめて奇談逸話との間に、模糊たる限界が生じかけた。尤もその限界たるや、甚だ明確ならざるものではあるが」「演義體の小説は宋に於て起つた。これが發達して元に及んで、見事な小説があらはれるやうになつた」(支那小説戲曲史概説)

また、小説が、奇異譚から始まつたといふ根據に對しては、坪内逍遙氏が、「小説の變遷」において、

「小説は假作物語の一種にして、所謂、奇異譚の變體なり。奇異譚とは何ぞや、英國にて羅マンズと名づくるものなり、羅マンズは、趣向を荒唐無稽の事物にとりて、奇怪百出もて篇をなし、尋常世界に見はれたる事物の道理に矛盾するを敢て顧みざるものにぞある」斯れは上古の魔イソロジイ、即ち鬼神法といへるものは、所謂羅マンズ譚(奇異の濫腸にて其傳おほく假作にいで、若くは訛傳になりたること、もとより疑ひなきに似たり(小説神髓)

これ等は重に「Romance」もしくは「作り物語の意味から出た「fiction」の定義を示すもので、「歐洲文學字典」の

著者ロオリ・マグナスによれば、「フランス語のロマンは、想像にかもし出された非眞實の世界のことで、早い話が騎士、妖精譚、アルカデヤ物語、理想郷物語等―それは原則的に、現實から超越して、題材を、空想の領土に求める」文藝である。しかし、一切の小説が、悉とく、さうしたロマンズや、奇聞からのみ跡づけられると見るのも一面觀に過ぎないので、たとへば歐羅巴の最も初期の小説は、アイスランドのサアガス、*Sagas* から始まるといはれる。しかし、アイスランドの傳説は、スペインのそれと異なり、「いづれも現實の素材に築き上げられて居ながら、スペインのそのやうに、現實を浪漫化しない。また宣傳化しない」(マグナス)。いはゞそれらは現實主義だといふのである。

一體、小説「*Novel*」の語原は、イタリア語の「*Novella*」から出た。マグナスは *Novell* を定義して、「ノヴェラは、簡潔な手法と、現實主義、及び、人生の直接的な反映であり、*Romance* の原料の一つから引き出された騎士、冒險の物語たる *Roman* とは嚴重に差別される。」といふ。世界の小説歴史の發展を辿つて來る場合、一般には、傳奇小説、奇聞小説が、小説の先驅をなしながら、その國々によつて、小説が傳奇小説よりも早く發生し、もしくは傳奇小説と小説が同時に發生し、平行し、もしくは、傳奇小説が長期に互つてその國の文學を獨占し、小説の發生が、後代まで發展しなかつた状態にあつた等の、事實を見るのは、極めて興味がある。日本の小説發生史は、たしかにその中での、特異な事例と見るべき性質のものであるが、歐羅巴の眞實の意味の小説史は、大體十四世紀の、ボツカチオの「デカメロン」から跡づけられる。「これは小説の形式を着た、實人生の經驗を、心理描寫によつて解説した、最初の現實主義の小説」である。その歐羅巴の紀元前において、ギリイスの最初の小説が、ゼノホオンの「サイロビイデヤ」であり、それから始まつて、グリコ・ロマン時代の作家群その他、ラテンの作家群、みないづれも彼れの流れを酌み、アビュリアスの「黄金の驢馬」でも、ペトロニアスの「サチリコン」でも、いづれ劣らず「脚色の

多奇と、事件の變化」に力を入れた浪漫的作家であつたことを思へば、浪漫作家があり、そして後に「デカメロン」のやうな現實主義小説が出たその推移は、おそらく自然であるかも知れない。しかしいかなる意味においても、小説が本質的にロマンスよりも優越した價値を帯びることが必然であるならば、日本の小説文藝が世界において最も古く、すでに九世紀においてその萌芽を見たばかりでなく、「伊勢物語」「源氏物語」その他が、何れも純然たる現實主義の作物であつた事は、一つの奇觀であると云へるであらう。

### 三 小説、稗史の定義

小説ノベルの定義を、始めて日本の文壇に教へた人は、坪内逍遙氏だといはれる。氏が「小説神髓」の小説の種類で、小説ノベルを「尋常の譚上のほものがたり」、羅ロマンスを、「奇異譚」とし、更に小説を、現世いま(世話)ソシヤル往昔むかし(時代)ヒストリカルとし、更に(世話)を、上流社會、中流社會、下流社會と分類し、羅ロマンスを、嚴正まじめ、滑稽おどけの二項とし、その全部を、「假作物語つくりものかたり」の系列に包括してゐる。今日から見ると、こんな分類は、大ざつぱでもあり、個々の定義としては、いかにも原始的な無意義さへをも含んでゐる體系である。またそれぞれの解説にも見當のちがつた部分が多いけれども、それをここで取上げて論ぶ必要はない。あれだけの新説でも、四十餘年の黎明期のわが文壇に、どれほど大きな示唆となり、反響となつて、新時代の文壇の眼を見ひらかしたか知れないのである。しかし自分のこの小論文は、小説ノベルを、一般に定義されてゐるやうに「現世物語いまは、現世の情態を材料として、其の趣向を設くるものなり」(小説神髓)とする解釋によらない。なぜなら、わが國にあつては、小説ノベルはむしろ極めて廣義に解釋され、フキクシヨンも、ノベルも、ロマンスも、みな小説の名目の下に綜合されるのが常識だからである。「小説」と言ふ漢語は、「漢書藝文志」十七卷に、

「小説者流は蓋し稗官に出づ、街談巷説、道聽塗説する者の造る所なり。孔子曰く、小道といへども、必ず觀るべきもの

あり、遠きを致し、泥むを恐る。是を以て君子爲さざるなり。然れども亦た滅せざるなり。閩里小知の者の及ぶ所、亦綴つて忘れざらしむ。如し、或は一言の采る可き、これまた芻蕘狂夫の議也。」

とある事から採つた。稗官の稗は「細米を稗はひとなす、街談巷説、其細碎の言なり、王者閩巷の風俗を知らんと欲す、故に稗官を立て、之を稱説せしむ。今世亦た偶語を謂つて稗となす」「宇治拾遺物語」の源隆國は「もとどりをゆひわけて、おかしげなる姿にて、むしろをいたにしきて、すゞみ侍りて、大なるうちはをもちて、あふかせなどして、往來の者、たかき賤しきをいはず、よびあつめ、むかし物語をきかせて、我はうちにそひふして、かたるに従ひて、おほきなる草紙にかゝれけり」で、十六卷百九十六條の街説を集めたが、この稗史の方は、稗官が、民間に傳へられてゐる細かい話や噂を聞き集めて、それを記録して官廷に報告する「その集めた小説なるものは、今日の新聞雑誌の記事のやうなものであつたらう。」わが國の「小説」と言ふ命名はそこから出た。普通には「稗史小説」と並べても言ふ。曲亭馬琴が、「稗史事に益なしと雖も、寓するに勸懲を以てす」とか、「毎歲著はす所、稗史小説に非ざるは莫し」とか、「夫れ隠れたるを求め、怪しきを述作る。小説野乗の果敢なきも、其大筆に至りては、必ず作者の隱微あり、是を弄ぶ者甚だ多く、是を悟る者の得易からぬは、昔も今も同じかるべし」とか。馬琴の稗史小説觀を知るべきであらう。

#### 四 平安朝時代の小説

日本文學通史には幾通りの區分もあるが、日本小説通史は、何期に區分すべきであるか。もし日本の文學史を、上古、中古、近古、近代、明治、大正、昭和と區別するならば、日本の小説の發生は、中古の後期から始まるし、徳川末期までを十期に分れば、それは、第六期延喜天曆朝から、第七期寛和以後までに互る。ここでは、前者の分

類に従つて、日本小説史の輪廓を展望することにしよう。

日本の小説は、傾向から云へば、傳奇小説ともいふべき「竹取物語」と、寫實小説とも呼ぶべき「伊勢物語」「落窪物語」「宇津保物語」「大和物語」「濱松中納言物語」「とりかへばや物語」「堤中納言物語」等の物語物の對立をもつて始まつてゐる。「竹取物語」は、「源氏物語河海抄」には作者不知とあるが、作者は源順、延喜以前の作物だらうとの説もある。すれば九世紀である。世界での散文小説として最も早い。構想がひきしまつて單純ながらも、殊に滑稽味と諷刺味が朗らかに交錯した垢のぬけた手際は、今日から見ても、日本の小説として、珍らしい短篇である。「伊勢物語」は在原業平の作、歌謡と地の文とを巧みに入れませた断片的な挿話を並べた歌物語の一種で、小説としては事件の進展性が淡い。たゞ主觀と敘事の組合せに、一種の違つた形式を與へてゐる。「宇津保物語」は十世紀頃のもの、二十卷三十冊、同じく作者不詳の「狭衣物語」と共に長篇であるが、繁瑣であるし、脚色もいはゆるルウズ・プロットに屬する。「濱松中納言物語」「とりかへばや物語」、これまた事件の單純さと、幼稚なロマンチズムと、教訓主義的の淺薄さが目に付く。「堤中納言物語」は、我が邦短篇小説の先驅といはれるが、緊張した文章もよいし、事件の配りもすつきりしてゐる。その外、日記文學がある。日記はそれ自身、忠實に生活の感想を現はした文學であるだけ主觀的だ。その生活の内容が深ければ、それだけ文學の一面にはなり得るが、これはたゞ素材として残るだけで、小説として採り上げるわけに行かない。「日記」だけに止まらず、もともと「物語」そのものは、一人稱の人間が、挿話の断片を、何等かの様式で報告する形に始まつたもので、始めから一つに纏められた、一定した構圖に依頼しない。もしそれが小説として表現されるならば、それには二つの形式が必然に創り立されねばならない。第一は、個々の談片を獨立させながら、その一つ一つに、同じ程度の價值を與へさせる行き方であり、他の一つは、個々の談片を一貫して、一つの大きな人生様相にたゞき上げる仕事である。前者では、「アラビヤン・ナ

イツ」が、一つの物語から、いくつもの小話を放射する封筒式作法エンペロオプファンヨンをとり、或は「デカメロン」のやうに、一つの雰圍氣と環境の世界の中で、變化のある種々相を巡觀曝露する行き方等であるが、しかし以上のやうな物語時代には、何等の創作上の苦心も、發明も見出されない。後者は、近代小説發展の大道ともいふべきもので、それが、それこそ、小説がいち早く十四五世紀において「物語」りの原始的な着物から解放され、散文文學の中樞となつた原因である。人類は雜然として、見果てもつかない複雑した現象の前に立つと、相異性よりも、近似性を先づ印象する方の本能がまづ強く働らく。かつて原始人の生活であつたところの、洞窟内の心覺えの爪搔きの繪畫や、突發的な身振りや、思ひ付きの歌唱や、斷續した叫喚や、それらの統一のない藝術は、時代と共に整理され、それを系列的に綜合しようといふ願望の刺激が強くなる。系列的な排列は、まづ近似性の選擇とその排置の働らきによつて始められる。それが構成プロットである。構成が主題テーマによつて武裝される。そこに「小説」が在る。物語は、まだ十分に磨き抜かれない小説の姿であり、奇聞エキセントリックや物語に、多かれ、少なかれ、意識した構圖を與へたものが小説である。丁度隨筆エッセイか、單純な金言マヤシムがその起原を作つてるやうなもの。だから、小説の史的原則は、「連續性の緊密」、かつその「漸進的な追撃」にある。(それがあまりに定型化した近代であるために、ジョイスや、プルウストのやうな、反連續性の小説の叛逆が起つたのであるか)、わが國の物語文學は、寛和以後、(花山天皇の寛和期)日本紀元一六四〇年時代に入つて、紫式部の「源氏物語」の發現を見るに至り、始めて小説としての生長が認められるに至つた。「源氏物語」以前の物語文學は、胎生期物語文學の主要條件たる、個々の事件の報告を要素とするだけで、人物の性格などは、概念とか、類型ともいへぬ程度の粗末なものであつた。「源氏物語」は、構成としては、必ずしも完成した小説といへぬであらう。安藤爲章が「紫家七論」の中で、その文章を無雙とし、「和歌並に詞ともに萬葉・古今・伊勢物語・うつほ・竹取などの古體をはなれて、ものやはらかに、おほどかに、安らかにやさしく、大凡吾國の風流をつくしたれば見る人をして倦事

をしらざらしむ。まことやまとふみの上なきものなり」チェンバレンが、「紫式部の文體は、極めて緻密に、複雑に入り組ましてある」は、ともに文體批評であるが「源氏物語」が「ダンテ、チョオサア、ボツカチオ等が、また歐洲文學に現はれる前に現はれ」た「驚異的な著書」としての、最も重要な價值は、「作品中の人物が現實的で、彼等の動作や感情が精巧に描寫され、貴族的な一つの過去の社會を、恰も目に見えるやうに敘述した。それと共に、その個性描寫において、今までに見られない多様性と精確性を帯びたことにある。この書がワレリイ氏によつて英譯されるや、かの地の批評家の禮讚の一致した焦點となつてゐるのは、西曆一〇〇四年において、早くもかくも優れた寫實小説が日本において完成されたといふ點である。なほ平安朝時代は、女性の文學者が多かつたために、假名文字が、文章の上で使用された。紀貫之の「土佐日記」で、女もすなる云々と云つたのもそれであるが、「源氏物語」はおよそ假名文字文學の最高頂に達するもの。次に、日本の散文文學は、内容にも、形式にも、絶えず海外文學の影響下に生長して來た事實はどうとも動かされない。王朝時代の小説の人生觀、世界觀は、支那から輸入された道教、佛教等の思潮によつて支配され、わづかに、時代風俗をその中から探し求める外には、その運命觀であれ、道徳性であれ、大體、支那、印度の思想に、源流を跡づけられねばならぬ事も注意させる。またこの時代の小説作品ともいふべきものは、貴族の生活を對象とした宮廷文學であり、作家が宮廷人である。民衆の中には、小説などの著述は求められなかつた。民衆による文學の生れる機縁は徹底的になかつたのである。

## 五 近古時代の小説

近古文學の名は、鎌倉時代、足利時代、土御門天皇の天治(紀元一千八百六十餘年)から後陽成天皇の慶長(紀元二千二百七十餘年)まで、約四百十餘年を概括する。散文文學としての小説は、鎌倉時代にあつては、戰記、軍物語いくさものがたりが

主體であり、足利時代にあつては、戦記の系統を引いた歴史文學、英雄物語や、教訓物、お伽草子の類を見るに過ぎぬ。「源氏物語」を轉機として、もう一度小説時代が後退したとも、發生期に還元したともいへるほど、小説技術が萎縮し、作物としても、殆んど見るべき成績のなかつたスタンブ時代である。まづ鎌倉時代の軍記、もしくは軍物語いくさものがたりを挙げれば、「保元物語」三卷、「平治物語」三卷、「源平盛衰記」四十八卷、「平家物語」十二卷、前二者は、葉室大納言時長の著述といひ、後二者は異説が多くて著者が確かでない。鈴木弘恭氏は、「是皆な古への物語とは異にして、實録なり」といふが、後の「太平記」を合せての、以上の五大戦記物語は、同じ實録でも、近代文學の戦記物、軍物語などと比べものにならぬほど文學性を含んでゐる。日本の戦争文學として、精彩に富み、詩的な、もしくは人間性的な、無韻の敘事詩であることでも、その王座に屬すべきものであらう。「保元物語」「平治物語」は、ともに極めてじみな手法でありながら、粗朴な寫實脈に少しのゆるみもない。戦争の華やかさと、哀別離苦の悲しみとを同一の平面に描きながら、それぞれの境地や心理を、如實に浮き出させる作家の客觀的な觀照の冴えは賞讃に値ひすべきものがある。多少の傳奇的なものが含まれて居るにしても、それは作家の意識した目的ではない。王朝文學につきまといふ因果律の人生觀の濃度が稀薄であることから救はれるし、リアリズムの手法から云へば、われ等は、他の三大戦記物以上に、この二著を高く買はうとするものである。少くとも、裸かな人間がそこにある。「源平盛衰記」は、「平家物語」を更に敷衍したものであるといふのが通説であり、それだけこの方は、記實としての豊富さを、擇ぶべきであらう。「平家物語」が、戦記物語としての、最高峰に据ゑられるのは、それがもともと琵琶を弾じて朗讀した敘事詩であるだけに、修辭の華かさと、浪漫主義な事象觀が目立ち、ことに、文章の諧調の美しさにおいても異常な感激を興へるからである。けれども「平家物語」の特異な部分は、それが單なる平家の没落史を直敘したものでなく、その底に大きく横はるところの、作家の悲觀的な運命觀を説明するために、平家の盛

衰を材料として捉へて來たことにある。その咏嘆的な時代觀、世界觀にあてはめるために、平家の盛衰史が殊に色彩された作爲があることも見のがすわけに行かないのである。その點では生きた材料として投げ出された「源平盛衰記」の方に、むしろ有り得べき現實を見出す場合があるのもこの理由による。

室町文學期に入つて、歴史文學の直系をついだものが、玄惠法師、もしくは小島法師の著作だと傳へられる「太平記」四十一卷がある。花園帝の文保二年から、後光嚴院の貞治六年まで、五十年間の事蹟を記す。五大戰記物語の中、「保元」「平治」物語の修辭は、いづれも假名文字文學の過渡期を示すに過ぎないが、「平家物語」「太平記」になると、佛語、漢語、和語が自由に入りみだれて、自然に新しいさんらんなる修辭の時代に入つた。朗讀的な韻律を重んじ、耳に快くひびく諧調を作り出すために、漢字が多く採り入れられて來た動機も解るが、後者の著者は當時知識層たる僧侶であり、前者もまた教養の高い公卿であつた等の事情が、自然と高級な用語を驅使する結果にもなつたであらう。「太平記」は、「平家物語」のやうな主觀的な分子が少ない。また人物の批評に對しても、いやに固苦しい道德批判が稀薄である。それにかゝはらず、あまりに美文的であらうとする精一杯の華麗な形容や、口調が、今日から見ればあまりにも空虚な努力に見え、誇大され、それだけ事象の眞實性を塗り消した憾みがある。それがまた長い間、美文の典型として愛讀されたわけでもあらうが。

英雄物語ともいふべきものは、著者も年代も不詳な「義經記」八卷と、同じく「曾我物語」十卷がある。その外、<sup>フエイブル</sup>寓話の搖籃ともいふべき教訓小説や、徳川時代のお伽小説を先驅づけた「鉢かつぎ」「福富草紙」「唐糸草紙」その他の他があるが、たゞそれが、「草紙」物の名をここに見出すだけで、文學的に擧げるべき價值は少ない。

## 六 近代文學 江戸時代小説